

立命館経済学 第一卷 総目次 (昭和二十七年)

論 説

資本主義貨幣と社会主義貨幣	武藤 守 一	一	三
統計的方法の本質	関 弥 三 郎	一	二八
附加価値税の本質	箕 浦 格 良	一	五九
わが国塩業労働における封建性と近代性との交錯	大 山 敦 太 郎	一	八九
——特に塩業における親方制度の推移に関連しての一試論——			
労働と社会発展の関係	阿 部 矢 二	二	三三
財務諸表の分析における基礎的一問題	津 ノ 国 長 四 郎	二	五二
郷土産業考察の一例 (上)	淡 川 康 一	三	一
わが国塩業労働における封建性と近代性との交錯	大 山 敦 太 郎	三	一八
——特に塩業における親方制度の推移に関連しての一試論——			
資本主義社会における小農経営	阿 部 矢 二	四	一
企業の指導原則としての収益性	祭 原 光 太 郎	四	二九
教父のおよびスコラの所有観	高 橋 良 三	四	五五
郷土産業考察の一例 (中)	淡 川 康 一	四	八七

末川博士還曆祝賀論文集(五・六号)

経済学と地理学との関係	淡川 康	一・五・六	一	五三五
農地改革の結果の二、三について	阿部 矢	二・五・六	一三	五四七
近世における畿内在郷商人の高利貸資本について	足立 政男	五・六	二八	五六二
——山城国乙訓郡神足村絞油商油屋弥兵衛(現岡本家)の場合——				
中小企業対策としての調整組合に関する問題点	井上 巖次郎	五・六	五四	五八八
リカードオ理論における貿易による搾取の問題	井上 次郎	五・六	六四	五九八
わが国漁業における共同経営の典型	大山 敷太郎	五・六	七九	六一三
資本論の学的体系性	梯 明	五・六	一〇一	六三五
——冒頭文節の体系的意味を分析するための序説として——				
経営における職制組織	祭原 光太郎	五・六	二八	六六二
東南アジア貿易の振興と経済開発について	高見 沢茂治	五・六	一四二	六七六
労働協約と社会保障	平田 隆夫	五・六	一五九	六九三
ドップ恐慌論の検討	松田 弘三	五・六	一八三	七一七
——恐慌論の基本問題について(一)——				
ヒュー・ダルトンに於ける経費に関する理論	箕浦 格良	五・六	二〇五	七三九
財閥解体政策の基盤とその変遷	武藤 守	一・五・六	二二二	七五六
——日本経済の従属化と軍事化への序説——				

アメリカにおける労働組合の特質と協約のパターンについて	森川	信	五・六	二四九	七八三
米国に於けるアクセレレーション問題	宇都宮	巖	五・六	二六六	八〇〇
フィリップ・シドニーに就いて	岡橋	祐	五・六	二八二	八一六

時 論

中小工業と長期金融	井上巖次郎	二	一四三		
ポンド過剰の問題	井上次郎	二	二一五	三	

研 究

特殊的生产について	小牧聖徳	二	六六	二〇八	
近世における山城農民の経済生活(上)	足立政男	二	八〇	二二二	
保険差益の会計処理について若干の考察	寺島平	二	一〇〇	二四二	
近世における山城農民の経済生活(下)	足立政男	三	一〇三	三六三	

講 座

統計調査法	関弥三郎	三	六八	三二八	
任意標本調査法(一)	関弥三郎	四	九四	四九〇	

資 料

LIFO価格指数構成方法	平島平	三	一二六	三八六	
--------------	-----	---	-----	-----	--

書 評

R. T. Bye 社会経済と価格体系 山田邦臣..... 一三二七・一二七

労働問題に関する新著(二)..... 平田隆夫..... 四・二二九・五二五

(1) 米国連邦労働省編「米国労働運動小史」一九五一

(2) 国際労働局編「永続的平和——国際労働機関の進路」